

---

# 環境対応革開発実用化に関する技術討論会及び 東京農工大学公開セミナー概要報告

東京都立皮革技術センター

---

平成18年9月29日(金)、東京都立皮革技術センターの施設公開日に、平成18年度環境対応革開発実用化に関する技術討論会（シンポジウム）及び東京農工大学農学部硬蛋白質利用研究施設公開セミナーが、経済産業省皮革原料問題等研究会、日本皮革技術協会との共催で行われた。本シンポジウムは主として環境面から日本の皮革産業の今後のあり方を探る討論会であり、経済産業省の補助により例年東京都と兵庫県で開催されている。また、昨年から東京農工大学の公開セミナーを同時開催し、一般の都民にもコラーゲン等に関する基礎知識がよくわかる親しみやすい構成になっている。当日の参加人数は36名。長時間にわたり活発な討論が行われた。その概要について報告する。

## I. シンポジウム

### (1) 日本における革中の有害物質に対する基準値の設定の試み（皮革消費科学研究会 会長 中村 蔚氏）

日本皮革技術協会はこれまで国産革及び輸入革を収集し、ヨーロッパで制定されている環境ラベル基準値に対する適合率の検査等を行ってきた。平成17年8月、(社)日本タンナーズ協会技術委員会の協力の下、エコラベル基準値策定委員会が設立され、日本における革中の有害物質検査済ラベルの基準値の策定を検討してきた。その結果、

日本における革の検査項目として、染色摩擦堅ろう度、臭気、ホルムアルデヒド、重金属、有機塩素化合物、染料の6種類を選び、その細目として基準値項目13種類を設定した。

エコラベルの活動は強制的なものではなく、環境保全に対する製品のあり方を自発的、積極的に開発することに意義がある。エコラベルの認証取得はあくまでも企業がとるべき自主的手段の一つである。今後は、検査機関、審査・認証機関等をどこにするかなどの運用法を考えていかなければならない。検査機関については、国内の既設機関を利用できるが、審査・認証機関についてはさらなる討議が必要であろう。本活動には消費者・製造者双方の完全な任意参加が原則であり、相互の信頼が成功の鍵を握っている。したがって、運用システムの確立には、例えば生産者、販売者、消費者、各種団体、NPO、先発機関、貿易関連機関、関連行政機関等からの幅広い意見を求める必要がある。

### (2) エゾシカの保護と皮利用（日本皮革技術協会技術スタッフ 竹之内一昭氏）

エゾシカは1900年代後半から急激に個体数が増加し、それに伴い農作物の被害額も増加している。北海道は2004年に「非常事態宣言」を発し、捕獲数の増加を図ってい

る。鹿の狩猟目的は主に鹿肉の食材としての利用であるが、副生物である毛皮や皮は産業的には全く利用されずに廃棄されている。現在、奈良県のタンナーと協力して、皮革としての利用を検討している。現段階では剥皮方法があまりうまくなく、より丁寧に剥皮するようアドバイスしている。また、猟師の人たちにはなるべく胴体を避けて射撃するよう指導している。その方が良質の肉と皮が得られる。現在、エゾシカの捕獲数は年間7万頭程度であるが、ビジネスとして成立させるには10万頭前後が必要だろう。

## Ⅱ. 東京農工大学公開セミナー

機能性食品としてのコラーゲン（東京農工大学農学部助教授 野村義宏氏）

コラーゲンはヒトの全タンパク質の約25%を占め、皮膚、骨、軟骨、腱をはじめ、各種臓器の結合組織を構成している重要なタンパク質である。現在、20種類のコラーゲンと約25種類のコラーゲン分子鎖である $\alpha$ 鎖が同定されている。化粧品や機能性食

品としてのコラーゲンが認知されてから、ゼラチンを加水分解した、ゲル化しない低分子コラーゲンが「コラーゲン加水分解物」として用いられている。コラーゲン摂取により期待される効果として多くの企業が、①骨密度改善、②皮膚の水分保持力向上、③胃粘膜保護、④腸管吸収向上、⑤免疫賦活等を挙げている。これらの効果を検証した研究はまだ少ないのが現状である。東京農工大学ではこの点に関し研究を進めている。コラーゲンの機能にはまだ不明な点が多く、今後もさらなる研究が必要である。



総合討論の様子